

Ⅵ. 「チェルノブイリ事故10年後の健康影響」会議に参加して — キエフ(ウクライナ)にて —

三根 真理子

<キエフ行のいきさつ>

1986年4月26日、チェルノブイリの事故がおきて10年が過ぎた。この10年を振り返って追悼のイベントが各地で行なわれた。科学的立場からはウクライナ保健省が主催する「チェルノブイリと健康—事故後10年間—」と題した会議が1996年4月23日から25日の3日間、ウクライナの首都キエフで開催されることになった。ウクライナ保健省から長崎ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM :Nagasaki Association for Hibakusha's Medical Care)へ招待状が届いた。長崎県を代表して原爆被爆者対策課の木場田勇課長、長崎大学から奥村寛教授、三根真理子(朝長万左男教授の代理)の三人が出席することになった。

<日本からキエフへ>

4月21日、成田空港にて笹川記念保健協力財団チェルノブイリ対策室の榎さん、放射線影響研究所の柴田部長と合流する。ここでトラブル発生。荷物の重量オーバーで超過料金がいるという。「放射能Q & A」のロシア語版360冊を持っていくため、これが80kg近くあったらしい。1kg当たり5,000円で20万円というのである。ここでは榎さんの交渉でなんとか無事通過したようである。成田発、13時、フランクフルト着18時(日本時間:午前1時)。フランクフルトからキエフへは約2時間半であった。キエフ空港には通訳のリガチョフさん

が迎えに来てくれた。ホテルのチェックインも通訳なしには出来ない。リガチョフさんは昔、東京のソ連大使館で書記官をしていた人で、日本語が話せるだけでなく人柄も温厚で私達を親身に世話して下さった。英語が通じない国はほんとに大変である。噂には聞いていたが身をもって感じた。

<キエフにて>

4月22日(月)、キエフ診断センターの見学に出かける。キエフ第2病院の1階にある。子供たちが甲状腺の検診を受けにきている。超音波で甲状腺に異常がないか検診をしたり、顕微鏡で細胞診を、またデータの入力をと努力がなされている。笹川財団が寄付した日本の医療器具がいたる所にあった。キエフ第2病院にて夕食をとる。キエフでは病院や会社には必ず職員のための食堂があるそうだ。日本のように外食はしない習慣らしい。

4月23日(火)、ホテルで朝食。パック入りのジュースに始まりパンときゅうりにトマト、ハムにチーズ。卵かお肉かをチョイスする。食後に皆さんは紅茶(チャイ)。食事のたびに水を注文する。これは炭酸水でしかも有料である。ここでお金の計算をしよう。まず1ドルが18万5千クーポン。大体、20万クーポンを1ドルとして計算する。日本円にすると110円。30ドル両替すると550万クーポン。大金持ちになった気分である。

ウクライナ医学アカデミー放射線医学研究センターの研究者であるセルゲから電話があって11時にホテルにくるといふ。どうやら保健省の命令で案内役をおおせつがつているようだ。今日は会議の第一日目。ホテルの近くにある保健省の大ホールに向かう。受付はセルゲがしてくれる。プログラムでは第一日目の最後が奥村教授の発表のはずだが、スライドプロジェクターの準備はしていないらしい。この日は式典だからプロジェクターは使用しないとの理由らしい。どうも奥村教授の発表は第2日目に変更されたようだ。しかし、何時なのかかわからないという。会場に入るとナターシャがいる。ナターシャはセルゲと同じセンターの研究者で、1996年3月に長崎大学医学部に研修にきていた。コロレンコ保健大臣の挨拶にはじまり、WHO事務総長の中島さんの挨拶もあった。セルゲの所属している放射線医学研究センターの所長はロマネンコである。彼は事故当時の保健大臣だったとのことである。

4月24日(水)、会議の2日目。奥村教授の発表は何時なのか不明のまま会場へ。まだわからないらしい。日本では考えられないことである。一人目の発表が終わる頃にやっと発表時間がわかる。3人目に割り込めたとのこと。やっと奥村教授の発表が無事終わり、3人でほっと胸をなでおろした。

4月25日(木)、この夜はナターシャの誘いで、お勤めのチェルノブイリ事故10年祈念のイベントに出席した。10歳の子供たちがダンスをした。事故を思わせる内容であった。見ていると胸にこみあげるものがあった。事故の惨事を訴えるダンスだったためであろう。

4月26日(金)にチェルノブイリ事故10周年祈念博物館のオープンがあるというので参加することにする。しかし、前日、オープンの時間を聞いても「ノーボディノー」であった。翌朝、10時からという電話がかかる。博物館の前に着くと、重々しく警備している雰囲気がかめしく、人びとの谷間から背伸びして挨拶を聞いた。そばでセルゲが通訳してくれる。ウクライナの総理大臣、国会議長などそうそうたるメンバーが挨拶をする。こんなに近くで大臣をみてよいのかとも思った。最後に日本大使が桜を植樹した。桜とチェリーの2本を植えた。桜とチェリーのどこがどう違うのかわからなかったが、セルゲはそう言っていた。約1時間程でセレモニーは終わったが、博物館の中の見学は首脳陣がすんでからでないと入れないらしい。しばらく待って、博物館を見学する。チェルノブイリ事故の救援に使用した車や道具、亡くなった人の写真などが展示されていた。私はなぜかこみあげてくるものがあり、見るのを避けてしまった。この展示の中に日本語で書かれたコーナーがあった。それは広島からの励ましのメッセージと原爆を報道する新聞記事であった。

キエフ最後の夜、セルゲの両親がホテル近くの高級住宅街に住んでいるとのこと、招待される。玄関を入るとびっくり。絵がたくさん飾られている。おばあちゃんが文化庁を退職する時にプレゼントされたものらしい。しかも有名な画家の絵という。何十点と部屋中に飾ってあり、まるで美術館であった。絵を全部見終わり、ディナーが始まる。ディナーはとても御馳走で、キエフで食べた料理の中で最高のものであつ

た。家族そろって歓待して下さった。私の日本語は通じるようで、私が何か言うと、みんな笑うのである。楽しいディナーで最後の夜を過ごした。

<キエフから日本へ>

4月27日(土)、ホテルのチェックアウトをすませ出発。30分、広い道路をまっすぐに走り続け、ポリスプル(キエフ)空港に着く。税関を済ませチェックイン。リガチョフさんは13時40分の飛行機でモスクワへ戻るので別れを告げ、私達は14時10分の搭乗を待つ。

4月28日(日)、大阪着12時10分。たいしたハプニングもなく無事戻れた。3日間の

会議では、各機関の代表者がこの10年間の調査結果や事故の実態を報告した。ロシア語から英語への通訳で理解困難な面もあったが、有意義な会議参加であった。キエフを訪問して、笹川プロジェクトに携わる大学や放射線影響研究所の研究者、NASHIMの事務局の方々のご苦勞をかいまみた気がした。私は数日の会議参加であったが、多少の不自由を感じた。不自由というのは言葉が通じないこと、何から何までいつどうなるのかさっぱり分からないことであった。しかし、調査や検診をされる先生方は現地をまわり、エネルギー事情の悪い中、寒さや不便さの中で努力されているという。頭がさがる思いであった。



会議が終わって。

左より、リガチョフ、奥村教授、木場田課長、三根